研究論文

江戸期天守と大名支配
―城絵図に描かれた天守の形状―

The Castle Tower and Daimyo Rule of the Shogunate During the Edo Period
―The Shape of the Castle Tower as Depicted in Pictures of Castles―

中尾 七重
NAKAO Nanae

要旨

これまで城絵図に描かれた天守は恣意的な絵画的表現であり、実態を反映していないと考えられてきた。しかし近年、城絵図研究が進展し、幕用図や藩用図は信憑性が高いことが分かってきた。本論では、慶長国絵図、正保国絵図、日本古城絵図等を天守絵図資料とし、描かれた天守を比較検討した。そして、三重層塔型天守が譜代大名の基本形であること、徳川将軍家と親戚姻戚関係を持つことや幕府に対する功績により天守格式が上昇すること、大名として相応しくない行動や規則違反により天守格式が下降することなどが推測された。すなわち江戸時代には、大名支配の手段としての格付けに天守の形状が機能したと考えられる。こうして、いくつかの天守では、望楼型あるいは層塔型や重数など天守形状が江戸時代を通じて変動した。また、天守は主体部と下屋からなる構造のため、天守形状の変動は、天守の建替えによるのではなく、下屋や装飾部分の改修により行われたと考えられる。以上、天守絵図の分析を行い、天守形状についての新しい建築史学的視点を提示した。

●キーワード：天守（castle tower）／城絵図（castle pictures）／江戸時代（Edo period）

Ⅰ．研究の目的

近世城郭の全体像を論じた城郭研究者の鳥羽正雄[1]や近世城郭史の白峰旬[2]は、慶長期と元和・寛永期および享保期を近世天守形成の画期と捉えている。一方建築史学では、天守建築について藤岡通夫[3]、城戸久[4]、平井聖[5]、内藤昌[6]、三浦正幸[7]が、天正期から慶長期にかけて望楼型から層塔型へ発達したと述べている[8]。逓減率が大きい丸岡城天守と犬山城天守が初期望楼型、次いで松江城天守、そして逓減率が小さい後期望楼型の姫路城天守、彦根城天守が続き、層塔型の松本城天守・小天守は望楼型から層塔型への移行形態とされる。以上が武家諸法度元和令以前の築城で、その後、層塔型の丸亀城天守、宇和島城天守、備中松山城天守、弘前城天守、松山城天守が建築され、高知城天守は望楼型の復古築造と説明された。これらの建築史学の成果は現在の天守観を形作っているが、実際の天守遺構との齟齬も見られる。

内藤昌は、松本城天守を1590年代に建築された前期望楼型（1600年以前）の「井楼式通柱構法」と定義する一方、後期望楼型から層塔型への移行過程にあり寄棟屋根を先駆的に採用しているとも述べており、混乱が生じている[9]。さらに近年、天守の自然科学的年代調査や絵画資料の検討により、新しい知見が得られている。2019年の丸岡城天守学術調査で当初部材が寛永期と判明し[10]、1600年以前の前期望楼型ではないことが分かった。犬山城天守は、上層が元和六年（1620年）頃の増築とされてきたが[11]、2019～20年に行われた年輪年代調査で上層と下層の部材が同時期と判明し、増築成立説が覆された[12]。松江城天守は、痕跡調査と城絵図などを検討した研究報告[13]で、現在の姿は1740年頃の成立としている。

本論では、これまで描写が不正確とされてきた城絵図の天守画像を研究資料とし、望楼型から層塔型へ発達したとする発達説の再検討を行う。研究資料として、絵図が出版・公開されている「慶長国絵図」[14]、「正保城絵図」[15]、「日本古城絵図」[16]を用いた。また天守の直近形状の確認のため、城郭の古写真[17]を参考資料とした。

まず、絵巻物、屏風絵、城絵図における建築図の性質の違いを述べる。次に正保城絵図の天守画像が天守の当時の姿を反映し信憑性が高いこと、元和一国一城令・武家諸法度公布から正保城絵図提出に至る元和・寛永期に近世天守が成立したことを述べる。また正保城絵図の分析から、層塔型天守が譜代の標準であること、家康および徳川宗家との縁戚関係により天守の格式が上がること

を示す。慶長国絵図の検討から、御家騒動などで処分を受けた場合は天守の格式が下げられることを示す。

次に、江戸中期以降の天守の形状変化について、正保城絵図および日本古城絵図に描かれた天守形状と明治古写真や現存天守の天守形状を比較検討する。天守形状が正保城絵図と日本古城絵図で異なる場合、また日本古城絵図と明治古写真・現存天守で異なる場合がある。これは正保以降も形状の変化した城郭天守があり、その形状変化が絵図に留められていると考えられた。その変化は、正保城絵図の分析と同様、幕府の大名支配の一環である城郭規制と関連づけられる。すなわち、御家騒動などの不祥事により天守格式は下げられ、徳川家との縁組により天守格式が上げられ、その度に天守の外観が改変されるのである。その結果、江戸時代を通じて形状変化した天守が存在した[18]。形状変化した天守も、形状が維持された天守も、細部を含めた形状は、その天守が建てられた当初の姿ではなく、江戸期の格式変遷を経た江戸末期の姿で、それを我々は見ているのである。

最後に、天守形状の変化を可能にした江戸期天守の構造形式を検討する。望楼型天守の構造上の特徴は、上層望楼部と下層入母屋部が構造的に分離していることとされる。一方、層塔型天守の構造上の特徴は通柱を用いた一体型の軸部構造とされる。しかし現存天守の構造を確認したところ、その多くは通柱を用いた主体部と、主体部に取り付く下屋から構成されている。また天守台の整形・不整形と、望楼型・層塔型に対応関係は無い。天守の外観は望楼型あるいは層塔型に区別されるが、いずれも主体部は通柱と貫や差物で固められた構造となっており、望楼型の入母屋屋根も層塔型の千鳥破風も唐破風も寄棟屋根も、付加あるいは除去可能なパーツと見なすことができる。望楼型と層塔型の違いは外観の格式表現と考えられる。以上より、本論は、城絵図や国絵図の分析に基づいて、新たな天守史観を提示した。

本論で用いる用語については、最上層以外が寄棟屋根の天守を層塔型とし、入母屋屋根の下層部分に上層部分が載る外観形状の天守を望楼型とする[19]。絵画資料では内部の階数が不明のため、三重層塔型、四重望楼型と、重数と形状を表記する。また「天守」の用語は幕府の認可による呼称と考えられ、城郭内での存在意義は天守であっても、公式には「天守」とされず「御三階」や「三重櫓」としか呼称できなかったことが、城郭補修に際し宛われた老中奉書に関する白峰旬の分析で明らかになっている[20]。本論は、「御三階」や「三重櫓」などと呼ばれた櫓についても、城郭内の存在形態が他の櫓と比べて抜きん出た重層の櫓については天守と同等に扱う。

本論では天守軸部を「主体部」および「下屋」からなる構造とする。「主体部」は、これまで「身舎」と呼ばれた部分に該当する。「下屋」はこれまでの「武者走」に該当する。本論での「主体部」とは、貫と差物を用いた複層階の構造体を表すもので、間面記法で表される「身舎」の概念や、近世民家の「上屋」の概念とは異なるため、「身舎」や「上屋」を用いない。「武者走」は身舎周囲の平面空間を表す用語で、構造的な意味を持たない。本論では、「下屋」という用語を「それ自身が自立せず、主体部に取り付く部分」として定義[21]し用いた。

「慶長国絵図」、「正保城絵図」、「日本古城絵図」は高精度精細画像が公開されている。注にURLを示したので、それをご覧いただきたい。

Ⅱ．絵画資料の建築図について

江戸時代には、江戸幕府の命で作成された幕用図、藩が作成した藩用図など、多様な城絵図が作成された。これらの城絵図は、遺構が失われてしまった近世天守の形状や傾向を知ることのできる貴重な歴史史料である。

これまで絵画資料に描かれた建築の図は実態を表していないと思われてきたため、建築史研究における絵画資料の活用は限定的であった。例えば、一遍上人絵伝では、背景の建築は実態を反映しておらず、類型的構図を引き写したことが明らかにされている[22]。

絵巻物の場合、主題は人物の偉業を通して発現する形而上の奇跡の物語である。物語の背景である建築を正確に描く必然性は少なく、むしろ象徴や場所として認識されることが重要である。文学作品としての絵巻物に描かれた建築は、一般的にその建物と識別される定形化された特徴（コード）が描かれる。一方、主題の人物は、他の人々とは異なる特徴的な顔立ちや体つきや姿勢、その属性を示すための衣服や持ち物が具体的に描かれる。

中近世移行期に作成された初期洛中洛外図屏風では将軍邸の建物について多くの議論[23]がなされてきた。現在も初期洛中洛外図屏風の景観年代について決着されておらず、描かれた建物の信憑性は証明されていない。そもそも描かれた建物の信憑性を直接的に証明する方法は存在しない。それでも描かれた建物を対象にした建築史学研究は盛んに行われている[24]。これらの建築史研究では洛中洛外図屏風に描かれた建物は当時の建物の実態をある程度反映していると見做されている。建築史学の立

場から描かれた建物を検討することは、洛中洛外図屏風研究にも、中近世移行期の建築史研究にも有益である。

江戸時代の城絵図は城郭そのものが主題である。堀の深さや石垣の長さ、天守の有無などが添書とともに詳細に描かれ、主題の在処を明確に示している。さらに近年の城絵図研究は幕用図や藩用図の制作過程や用途を解明している。これによれば、幕用城絵図や藩用城絵図は、いわば確認申請における設計図書のような公式文書であった。大名転封に伴う城の受け渡しにあたって、城絵図は引渡元の藩から幕府と受取藩に渡されていた。城検分を職務とする幕府の上使は、城絵図によって事前に城郭の概要を把握した。また城引き渡し・受取りの準備のための実務情報として城絵図が用いられた[25]。このように実務に用いられた城絵図は信憑性の高い管理用の公式図面であり、その絵画表現は恣意的ではない。城郭修補の度に城絵図は更新され、修補申請や城郭受渡しの際に複製が幕府担当官に渡された。国立国会図書館蔵「日本古城絵図」は、その膨大な城絵図の一部が流出し、旧鳥羽藩主稲垣家がそれを収集したものと思われる。

城絵図には近世初頭の城郭に関する情報が豊富に盛り込まれている。歴史資料である城絵図は城郭研究の対象となる。描かれた城郭をすべて無前提に肯定するのは問題があるが、「絵空事」とすべて退けるのは更に誤りである。本論は城絵図に描かれた天守を対象とした建築史研究という新しい研究領域を提示している。初期洛中洛外図屏風が中近世移行期研究の深化をもたらしたように、城絵図が城郭研究に活用されることを願う。

Ⅲ．正保城絵図の絵画表現について

慶長国絵図と正保城絵図で、あるいは正保城絵図と日本古城絵図で、あるいは古城絵図と明治初期の古写真とで、同一天守であるにもかかわらず、層塔型、望楼型、屋根の重数など、描かれ方に違いがある。これまで国絵図や城絵図の天守描写が不正確とみなされてきた大きな理由は、この天守画像の形状がくい違うことにある。

正保城絵図は正保元年（1644年）に幕府が諸藩に命じて作成させた城下町の地図で、天守や櫓、御殿、城下の町割などが精密に描かれ、石垣の高さ、堀の幅や水深が詳細に記されている。各藩は明暦（1655～1658年）頃までに提出し、幕府は紅葉山文庫に収蔵したが、幕末明治期に多くが散逸した。江戸幕府が作成させた国絵図や城絵図などの幕用図のうち、正保城絵図は城絵図に分類される。城絵図は城主が直接幕府に提出した。国絵図は、藩が国内各領分絵図をまとめて提出した。藩用図は各藩が作成した。日本古城絵図の多くは藩用図である。

正保城絵図には幕府の作成基準が存在した。本丸や二の丸間の石垣や櫓などを残さず記入することや、塀は材質まで分かるように表示することや、堀の広さ深さや地形、侍町や町家の表現などが細かく指定された[26]。すなわち「一、天守之事　天守ヲ絵ニ書、いくかいと有之儀、井垣之高さ有所迄、無相違様ニ絵図可仕由候事」と、天守についての規定がある（佐賀藩「多久家有之候御書類写」）。絵画表現についてはさらに細かく指示があった。「このように幕府が文書で示した絵図作成要項そのものは簡単なものであったにしても、諸藩側では具体的描法の詳細を幾度も井上筑後守政重以下の担当官に問合せて、幕命の諸事項に遺漏なきことを期したのであった。」と、矢守一彦は絵図の制作過程を述べている。

また、国絵図と城絵図はセットで作成されたことが、江戸幕府の御書物奉行近藤重蔵守重が著した「好書故事」に記録されている。これは元禄の新国絵図に関する記録である。先行する正保城絵図に関しても同様の指示が下されたと推測されている[27]。

幕用図の作成について各藩が幕府の指導を受け、たいへん神経を使ったことは、享保期と時期は下るものの、米沢藩の「御絵図御指図帳」にもうかがえる。この指図帳は、国目付役に微細な点まで指示をあおぎながら「御国絵図」とともに「御城絵図」「城下絵図」を提出するに至るまでの「覚」書きである[28]。

正保城絵図は幕府の作成基準・規定に基づき、精密に作成された絵図であり、その表現に恣意的な要素の入り込む余地は無かった。そこに描かれた天守は、現実の天守を反映し、幕府の基準に照らして必要な情報が欠かさず盛り込まれていたと考えられる。

Ⅳ．城郭統制と近世天守の成立

鳥羽正雄は、城郭考察上の時代区分として近世前期を、(1) 信長入京・将軍義昭期（1568～1573年）、(2) 信長覇者期（1573～82年）、(3) 秀吉・豊臣期（1582～1600年）、(4) 家康・慶長期（1600～16年）、(5) 秀忠・家光期（1616～51年）と区分した[29]。天守建造に限定すると、安土城築造から関ケ原合戦までの織豊期、徳川幕府開府から大坂夏の陣までの慶長期、一国一城令から正保城絵図までの元和・寛永期が対象となる。この時期区分は政治情勢の時代区分で、城郭機能もこの時期区分で変化した。

織豊期には、城郭は戦闘を担う実践的な施設で、関東

地方では城郭土塁が発達した。障子堀や畝堀は北条氏の山中城（国指定史跡）に、丸馬出しは武田氏の新府城（国指定史跡）に見ることができる。徳川氏は長篠合戦後、武田氏の築城技術を取り入れ城づくりを行ったことが諏訪原城の発掘で判明している[30]。畿内では城郭石垣が急速に発展し、安土城が築かれた。

慶長期は徳川幕府と大坂方が並立・対峙した時期で、平山城や平城の城郭が戦闘防衛力の誇示を、高石垣に聳える天守が威信を示した。徳川氏は織田・豊臣氏の築造技術を取り入れ、江戸城をはじめとする徳川の城を築造した。一方、豊臣系大名は姫路城や岡山城、広島城などの巨大城郭を築城した。

この二重公儀体制[31]を克服した大坂夏の陣の後、一国一城令と武家諸法度元和令を画期に、城郭建築は徳川氏天下支配の一端を担うこととなった。元和・寛永期に東北南部や九州東部で譜代大名を一斉転封し、「各地域ブロック内における譜代大名相互の連携を包摂した形で、全国の譜代系城郭を統合する巨大な徳川領国が幕藩制の安定化とともに完成した」と白峰旬は述べている[32]。

一国一城令は、「急度申入候、仍貴殿御分国中居城をハ被残置、其外之城者、悉可有破却之旨、上意候、右之通諸国へ申触候間、可被成 其御心得候、恐々謹言[33]」（厳しく申し渡す。貴殿の自国の居城のみを残し、その他の城は悉く破却すること。これは将軍の命令である。諸国にも通知するので心得るように。）である。

武家諸法度元和令の城郭規制は、「一、諸国居城雖為修補、必可言上、況新儀之構営堅令停止事」（諸国の居城は修理であっても幕府の許可が必要。まして新たに城郭を構え営むことは固く禁止する。）である。

武家諸法度寛永令の城郭規制は、「一、新規之城郭構営堅禁止之、居城之湟累・石壁以下敗壊之時、達奉行所可受其旨也、櫓・城門等者如先規可修補事」（新たに城郭を構え営むことは固く禁止する。居城の堀や石垣などが壊れた時はその旨を奉行所に届けて指示を受けなければならない。櫓や城門などの建築物は、先規どおりに修理せよ。）とあり、寛文令・天和令もほぼ同一である。

これまで城郭天守は、文献記録による城郭築城年が天守建造年とされ、建てられた当初のまま幕末に至ったとされ、江戸期補修も経年劣化を元通りにしたもので、記録に残らない改造などあり得ないと思われてきた。元和令と寛永令の違いについても、寛永令で作事（櫓・城門）規制が加わっただけと思われてきた。しかし、この認識を再検討する必要がある。

元和令と寛永令は同一の城郭規制ではない。元和令の城郭規制は一国一城令に沿った築城規制である。大坂方勢力を倒して元和偃武を実現し発令した一国一城令の「上意候」（将軍の意思である）、元和令の「必可言上」（幕府に届けなければならない）は、各大名の城郭が徳川氏の管理下に入ったことを宣言している。これに対し寛永令は、「達奉行所可受其旨也」（奉行所に届けて指示を受けよ）とあり、城郭維持管理の事務手続きを示している。奉行所が管轄したことも分かる。

ここで寛永令の「如先規」が注目される。「先規」とは櫓や城門の直近の姿を示しているが、その直近の姿が定まったのはいつ誰によってだろうか。徳川氏が全国の城郭を掌握する以前の織田豊臣系大名の天守を先規とするとは思えない。徳川氏は、豊臣期大坂城をすべて毀して盛土し、新たに石垣を築き、新たな徳川期大坂城天守を建築した。このように、豊臣支配を否定しその痕跡を消そうとした[34]徳川氏が全国一律に「先規」と示しているのであるから、これは徳川の「先規」に他ならない。その画期は元和と考えられる。

元和五年（1619年）福島正則改易事件で、城郭は城主の所有物ではなく、幕府からの預かり物であるため、修理・改造には事前の幕府許可が必要であることが、大名に周知徹底された[35]。ここに元和令から寛永令へ展開する過程が見られる。元和・寛永期に城の「先規」が成立し、城郭統制が本格的に開始した。大名は、国主（国持大名）、準国主（国持並大名）、城主大名、城主格大名、無城（陣屋）大名と格付けされた。城郭や天守を持つことは大きなステータスであった。

元和・寛永期が城郭統制の画期だったことは、譜代大名の転封からも窺うことができる。近世を通して転封が際立って多かった譜代大名は、国持大名というよりは徳川系城郭の城番として、徳川支配の一翼を担っていた。彼らは、国持大名の改易や不祥事、また幼君継嗣を契機に中継ぎとして、あるいは直接的な理由は無くとも転封を繰り返し、公儀権力を担う老中や幕府官僚である奏者番などを兼任し、徳川幕府秩序で地域を安定させる働きをした。これらの譜代大名の居城が定着するのが、元和・寛永期と、元禄・宝永期と、享保期である。寛永期は外様大名改易地（畿内・四国・山陰・東九州）への譜代設置、元禄・宝永期は一門・譜代改易地（上総・下総・信濃）への譜代設置、享保期は譜代大名の拠点地（北関東・信越）への譜代定着が見られる。この譜代大名の城地固定化により、幕領、譜代領、旗本領からなる徳川領国が

形成され、譜代大名が歴代城主を務める譜代系城郭の全国ネットワークが構成された[36]。

幕用図に関する老中奉書（城郭修補許可）の書式も、元和期が最初の画期という。元和から寛永前期の老中奉書は将軍と大名間の私的書状の性質を有していたが、寛永後期から正徳期に書式が整備され、享保から寛延期に画一的行政文書の書式が完成した[37]。

後に「先規」となる天守形状の規格が元和期に形成されたことは、正保城絵図の分析からも推測される（正保城絵図の分析は次項で述べる）。元和に各大名の格付けと天守格式が設定され、格式に沿った城郭作事が進められ、その達成度確認として幕府は正保城絵図を提出させたと推測される。そのため、必要情報を絵図に盛り込むための作成基準が正保城絵図で定められた。小和田哲男は正保城絵図の意義を「諸侯の城郭の要害としての役割の完全否定」であり「幕府に対する諸侯の屈服を意味する」「幕藩制確立過程の一つの要素」と述べている[38]。

次に、正保城絵図に描かれた天守について検討する。

Ⅴ．正保城絵図における譜代大名の三重層塔型

国立公文書館所蔵正保城絵図デジタルアーカイブに62枚の城絵図が収められている[39]。正保城絵図には天守や櫓、櫓門が詳細に描かれている。そこで各城郭天守の描かれ方について、天守形式（層塔型か望楼型か、層塔隅櫓か望楼隅櫓か無か）、外観の屋根重数、城絵図提出時の城主名、城主属性（外様か譜代か御一門か御三家か）、徳川家（特に家康）から見た親族姻族関係、備考（支城・屋根葺材の特徴など）、処分理由（御家騒動など）、を一覧表にした（表１）。一覧表では、譜代・親藩の三重層塔型を太赤字で示し、外様の三重層塔型を太青字で示した。

三重層塔型天守19例のうち本州が13例、中国四国が６例ある。本州13例のうち譜代が12例と親藩１例で、すべて徳川家臣である。四国九州６例は全て外様だが、家康縁戚３例、関ケ原合戦以来の徳川家臣２例、高台院の近親１例である。以上より本州では三重層塔型が譜代大名の標準形式、四国九州では譜代に準じる外様大名の標準形式と分かる。大名の側からは、譜代31例のうち層塔型21例、層塔隅櫓６例、望楼型２例と天守櫓無しが２例で、譜代はほぼ層塔型といえる。

徳川宗家の血を引く城主の場合、天守の格式が高くなり、重数が増える傾向が認められる。譜代の場合は、家康外孫真田信枚の沼田城天守が五重、家康従兄弟本多俊次の膳所城天守が四重、家康異父弟松平定勝の桑名城天守が四重、家康外孫岡部宣勝の岸和田城天守が五重、家康従兄弟水野勝成の福山城が五重、家康外孫浅野光晟の広島城天守が五重、家康外曽孫小笠原忠真の小倉城天守が四重、家康外孫松平忠昭の豊後府内城は四重である。

外様大名の場合は姻戚関係で天守の格式が高くなる。家康姪孫上杉綱憲の米沢城御三階櫓、家康甥北条氏重の掛川城御三階櫓の例がある。このほか、家康従兄弟山崎家治の丸亀城天守、家康外孫蜂須賀忠英の徳島城天守、家康外孫中川久清の岡城天守など、徳川氏と姻戚関係を持つ外様大名で三重層塔型天守の例が多く見られる。

一方、蟄居や改易などの場合は天守の格式が下げられている。この点に関して、次に検討を行う。

Ⅵ．格式が下げられた天守―慶長国絵図・正保城絵図

江戸幕府が国単位の絵図を最初に調進させたのが慶長国絵図である。慶長九年（1604年）に徳川家康が伏見城で、諸藩の伏見城詰役人を通じて諸国の大名へ国絵図と郷帳の作成・提出を命じている。江戸城火災などにより慶長国絵図の正本は現存しておらず、これに関する記録もほとんど無い。ただ、国絵図を作成した大名の側に、少数の控えや写しが残されている。現在確認されている慶長国絵図の控えや写しは、和泉、摂津、小豆島、越前、備前、周防、長門、阿波、筑前、豊後、肥前、肥後である[40]。このうち、和泉国慶長国絵図、越前国慶長国絵図、備前国慶長国絵図、周防国・長門国慶長国絵図、肥前国慶長国絵図に城郭天守が描かれている[41]。

慶長国絵図に描かれた天守が実態を反映すると考えられる例として和泉国慶長国絵図を検討する。慶長国絵図に描かれた岸和田城は慶長九～十一年（1604～06年）の状況に適合している。その後状況が変化し、正保城絵図に描かれた天守が築造されたと考えられるのである。

和泉国慶長国絵図の岸和田城には、二ノ丸に二重層塔型隅櫓はあるが天守は無い。しかし正保城絵図には五重層塔型天守が描かれている。慶長期の岸和田は豊臣秀吉従兄弟の小出秀政が領した。関ケ原合戦で西軍に属した秀政は、東軍に属し戦功を挙げた次男秀家に免じて改易を免れた。「泉邦四県石高」[42]に、「今之城、天正之比迄天守もなく堀、矢倉も麁相成に依て伏見之御城天守、矢倉門等迄被成御曳、石垣出来、小出播磨守御代之事、二、三之丸迄出来、又大坂御陣後、通筋堺町之門、堀、石垣、浜手石垣、南住間還之入口、門、堀、石垣等出来、須田次郎太郎殿奉行になり」と記されている。これより慶長段階で天守の無かったことが分かる。

表１　正保城絵図の天守形式と城主

	城絵図名称	天守形式	櫓	規模	城絵図提出時の城主	城主属性	徳川家との関係	備考	処分理由
1	津軽弘前城之絵図		層塔隅櫓	3重	津軽信義	外様		1627焼失	
2	南部領盛岡平城絵図		層塔隅櫓	2重	南部重直	外様			
3	出羽国新城絵図		層塔隅櫓	2重	戸沢正盛	外様			
4	出羽之国油利之郡本城絵図		隅櫓	2重	六郷政勝	外様			
5	出羽国秋田郡久保田城画図		層塔隅櫓	2重	佐竹義隆	外様			
6	出羽国米沢城絵図		層塔隅櫓	3重	上杉綱勝	外様	正室：家康曽孫		
7	出羽国最上山形城絵図	層塔型		3重	松平直基	親藩			
8	出羽国之内上山絵図	層塔型		2重	土岐頼行	譜代			
9	奥州仙台領白石城絵図		層塔隅櫓	2重	伊達忠宗	外様	家康外孫	支城	
10	奥州棚倉城之図		層塔隅櫓	2重	内藤信照	譜代			
11	奥州白河城絵図	層塔型		3重	榊原忠次	譜代			
12	奥州二本松城之絵図		なし		丹羽光重	外様			
13	最上東根城絵図	層塔型		2重	松平忠弘	譜代		支城	
14	上野国沼田城絵図	層塔型		5重	真田信政	願譜代	家康外孫		
15	下野国烏山城絵図		なし		堀親良	外様			
16	常陸国笠間之城絵図		層塔隅櫓	2重	井上正利	譜代			
17	常陸国水戸城絵図		層塔隅櫓	2重	徳川頼房	御三家	家康息子		
18	下総国古河城絵図	層塔型		3重	土井利勝	譜代			
19	下総世喜宿城絵図	層塔型		3重	牧野信成	譜代		柿葺	
20	相模国小田原城絵図	層塔型		3重	稲葉正勝	譜代			
21	越後国村上城之絵図	層塔型		3重	本多忠義	譜代			
22	越後国新発田之城絵図		層塔隅櫓	2重	溝口宣直	外様			
23	越後国古志郡之内長岡之図	層塔型		3重	牧野忠成	譜代			
24	越前国丸岡城之絵図	望楼型		3重	本多成重	譜代			本藩藩主：配流改易
25	信州上田城絵図		層塔隅櫓	2重	仙石政俊	願譜代			
26	信州高遠城之絵図		なし		鳥居忠春（処分）	譜代			刃傷沙汰
27	信濃国飯山城絵図		層塔隅櫓	2重	松平忠倶	譜代		柿葺	佐久間：無嗣改易
28	遠州掛川城絵図	層塔型		3重	北条氏重	譜代			
29	三河国西尾城絵図	層塔型		3重	井伊直好	譜代			
30	三河国田原城絵図		なし		戸田忠昌	譜代			
31	参州刈谷城絵図	望楼型		2重	松平定政（処分）	譜代			蟄居改易
32	美濃国大垣城絵図	層塔型		3重	戸田氏鉄	譜代			
33	美濃国岩村丹羽式部少輔居城絵図		層塔隅櫓	2重	丹羽氏定	譜代		柿葺	
34	伊勢亀山城絵図	層塔型		3重	本多俊次	譜代			
35	伊勢桑名城中之絵図	層塔型		4重	松平定勝	親藩	家康異父弟		
36	松阪古城之図		層塔隅櫓	2重		御三家		紀州藩支城	
37	近江国膳所城絵図	層塔型		4重	本多康俊	譜代	家康従兄弟		
38	丹波国福知山平山城絵図	層塔型		3重	松平忠房	譜代			
39	丹波国亀山城絵図	層塔型		5重	松平忠晴	譜代	家康姪孫		
40	丹波篠山城之絵図	層塔型		3重	松平康信	譜代			
41	和州郡山城絵図		層塔隅櫓	2重	本多政勝	譜代			
42	和泉国岸和田城絵図	層塔型		5重	岡部宣勝	譜代	家康外孫		
43	紀伊国新宮城之図		なし		徳川頼宜	御三家		付家老の城	
44	播磨国明石城絵図		層塔隅櫓	3重	松平信之	譜代			
45	美作国津山城絵図	層塔型		5重	森長継	外様			
46	備前国岡山城絵図	望楼型		4重	池田光政	外様	家康外孫		
47	備中国松山城絵図	層塔型		2重	水谷勝宗	譜代			
48	備後国福山城図	層塔型		5重	水野勝成	譜代	家康従兄弟		
49	備後国之内三原城所絵図		望楼隅櫓	2重	浅野光晟	外様		支城	
50	安芸国広島城所絵図	層塔型		5重	浅野光晟	外様	家康外孫		
51	出雲国松江城絵図	層塔型		5重	松平直政	親藩	家康孫		
52	讃岐国丸亀絵図	層塔型		3重	山崎家治	外様	家光従兄弟		
53	伊予国大洲之絵図	層塔型		3重	加藤泰興	外様	家康外孫の夫		
54	阿波国徳島城之図	層塔型		3重	蜂須賀忠英	外様	家康外孫		
55	土佐国城絵図	望楼型		3重	山内忠義	外様			
56	豊前国小倉城絵図	層塔型		4重	小笠原忠真	譜代	家康外曾孫		
57	豊後国日出城絵図	層塔型		3重	木下俊治	外様			
58	豊後之内臼杵城絵図	層塔型		3重	稲葉信通	外様			
59	豊後府内城之絵図	層塔型		4重	日根野吉明	外様			
60	豊後国直入郡岡城絵図	層塔型		3重	中川久清	外様	家康外孫		
61	肥前国唐津城廻絵図		層塔隅櫓	2重	寺沢広高（処分）	譜代			天草の乱 寺沢堅高改易
62	肥後国八代城廻絵図	層塔型		4重	松井興長	外様		筆頭家老	

元和五年（1619年）に譜代松平康重、寛永十七年（1640年）に譜代岡部宣勝が岸和田藩主となる。岡部宣勝は家康外孫のため、格式を上乗せし五重層塔型天守が建造されたと思われる。すなわち慶長国絵図も正保城絵図も実態を反映していると考えられる。

格式が下げられた例を越前で検討する。越前国絵図の丸岡城天守は三重層塔型、正保城絵図では三重望楼型で、現況は二重望楼型である（図１[43]）。大野城天守は越前国絵図では五重層塔型、日本古城絵図では三重層塔型、貞享五年（1688年）の越前国大野城破損修復願絵図[44]では一重御殿風である。福井城天守は越前国絵図では五重層塔型であるが、福井城天守絵図[45]では四重望楼型である。総じて越前国絵図の城郭は、それ以降に描かれた天守に比べて立派である。そのため越前国絵図の天守は、実態を反映しない絵画表現と考えられてきた。

海道静香は、「城郭の描写は、元和期の一国一城令以前であるので、北庄（福井）・丸岡・大野・府中・敦賀の五城にみられる。このうち、大野城に五層の天守が描かれているが、後述する名古屋市蓬左文庫所蔵越前国絵図では二層、東京大学総合図書館南葵文庫所蔵越前国絵図では三層に描かれており、天守台の規模からも五層ではなかったと推定されていることから、本図の描写には疑問が残る。」と述べている[46]。しかし元和前後の越前の政治状況に各天守形状はよく対応しているのである。

越前は、関ケ原合戦後、家康次男の結城秀康が一国を領有した。しかし元和九年（1623年）に嫡男松平忠直が不行跡で配流改易となり、福井藩、丸岡藩、大野藩などに越前が分割された。元和九年の改易以前は、越前松平氏は御三家に次ぐ御家門筆頭の家格だったので、北庄城の五重層塔型天守は妥当である。そして処分後に四重望楼型天守に格下げされたことも不思議ではない。

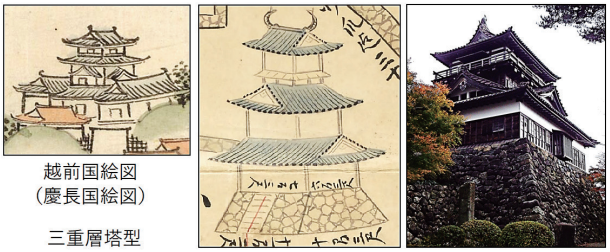
結城秀康家臣・大野城城主土屋正明の石高が三万八千石で、越後国絵図では五重天守である。これは決して破格ではなく、例えば寛永期の松本藩や岸和田藩も六～七万石程度で天守は五重だった。そして忠直改易後、結城秀康三男松平直政が大野藩を立藩し、譜代標準の三重層塔型とされたのも、あり得ることと思われる。

丸岡城天守も、忠直改易前の多聞櫓を持つ三重層塔型から改易後の三重望楼型へと格式が下げられた。敦賀城は一時幕領となったので天守が無くなった。

こうしてみると、越前松平家結城秀康の国持大名であり家康の次男という高い大名格により、越前国絵図に見られる越前諸城の天守は格式が高く立派だったのである。そして、忠直改易と越前分割により、以降は城持大名の天守となり、格式を下げられたと理解できる。越前国絵図の天守表現は実態を反映していると考えられる。

以上より、越前国絵図に描かれた天守が当時の天守の姿を反映しており、配流や改易などの処分を受けた場合は天守の格式が下げられたことを、正保城絵図と比較することで見出すことができた。正保城絵図は、元和・寛永期の最初の城郭規制実施状況を確認するための絵図であった[47]。そして元禄・宝永期、享保期にも幕用絵図が作成され、国目付に提出されている[48]。

次に、正保以降の天守形状の変遷を、日本古城絵図と明治大正期の古写真で確認する。



越前国絵図（慶長国絵図）　三重層塔型多聞櫓

正保城絵図　三重望楼型

現況(2015年)二重望楼型

図１　描かれた丸岡城と現況

Ⅶ. 江戸中期以降の天守―日本古城絵図と明治古写真

日本古城絵図は旧鳥羽藩主稲垣家が収集した城下絵図で、国立国会図書館デジタルコレクションとして公開されている。城郭修補や転封の際に用いられた藩用図や城下絵図からなり、天守表現はおおよそ信頼できると思われる。また、天守の多くは、明治六年（1873年）の廃城令で取り壊された。現存天守および明治初年の天守古写真から直近の天守の形状を確認した。

慶長国絵図・正保城絵図・日本古城絵図・古写真のうち、二つ以上で天守形状が判明する城郭天守を選択し、天守形状、元和・寛永期の城主格式および格式変動と城郭に関する事項を一覧表にした（表２）。

正保城絵図の17世紀中期天守と、日本古城絵図の17世紀後期～18世紀初頭頃天守を比べると、天守形状に変化のない場合と、天守の形状が変化する場合がある。

三重層塔型が変化しない例は、米沢城、古河城、関宿城、小田原城、長岡城、村上城、掛川城、西尾城、亀山城、明石城、岡城。四重層塔型が変化しない例は、桑名城、膳所城、尼崎城。五重層塔型が変化しない例は、岸和田城、松江城。松江城現存天守は四重望楼型で、日本古城絵図以降、幕末までに改変された可能性がある。

表２　描かれた天守形状の変遷

	国	城郭名称	慶長国絵図	元和-寛永期	正保城絵図1644-54	事項：正保以降	日本古城絵図17c後半～	中期以降	古写真	現状
1	津軽	弘前城		外様：1607津軽信枚：正室家康姪	3重層塔型			1810再建	3重層塔型	現存　重文
2	南部	盛岡城		外様：1632南部重直	2重層塔型隅櫓	1676再建	2重層塔型隅櫓		3重層塔型	1874取壊
3	出羽	山形城		1622最上騒動、親藩：1644松平直基：家康孫	3重層塔型	1668以降左遷地	天守なし			1870取壊
4	出羽	上山城		譜代：1622松平重忠	2重層塔型櫓	1697藤井松平家	3重層塔型　櫓3基			1697破却
5	出羽	米沢城		外様：1645上杉綱勝：正室家康曾孫	3重層塔型		3重層塔型　櫓		3重層塔型	1874取壊
6	会津	若松城		御家門：1643保科正之：家康孫			5重層塔型		5重層塔型	1874取壊
7	会津	二本松城		1643改易、外様：丹羽光重	天守なし櫓なし	1745六代高庸：正室吉宗従姪	2重層塔型　櫓			1868落城
8	陸奥	白石城		外様：仙台藩支城	2重層塔型	1671伊達騒動	3重望楼型	1823再建		1874取壊
9	陸奥	棚倉城		譜代；1627内藤信照	2重層塔型	三代弐信改革失敗転封	2重層塔型　板葺			1868落城
10	陸奥	白河小峰城		譜代；1643榊原忠次；家康姪孫	3重層塔型	1692白河騒動	2重層塔型			1868焼失
11	常陸	水戸城		御三家：1609徳川頼房：家康息子	天守なし		天守なし	1766再建	3重層塔型	1945焼失
12	常陸	笠間城		譜代：1645井上正利	2重層塔型	1692本庄宗資：綱吉叔父	3重層塔型			
13	下野	烏山城		外様：1637堀親昌	天守なし櫓なし		天守なし			
14	上野	高崎城		譜代：1621安藤重長			3重層塔型		3重層塔型	1877取壊
15	上野	沼田城		願譜代：1600真田信之：正室家康娘	5重層塔型	1658沼田藩立藩、1682天領・破却	天守なし			1682幕命破却
16	上野	館林城		譜代：1644松平憲寿		1661徳川綱吉	3重層塔型、2重層塔型			1683破却
17	下総	古河城		譜代：1633土井利勝	3重層塔型		3重層塔型		3重層塔型	1873取壊
18	下総	関宿城		譜代：1644牧野信成	3重層塔型	1671再建	3重層塔型、3重層塔型			1874取壊
19	武蔵	江戸城		徳川宗家	1633五重層塔型(1)					1657焼失
20	武蔵	川越城		譜代：1639松平信綱	1633天守なし(1)		2重層塔型、3重層塔型			1870以降取壊
21	相模	小田原城		譜代：1632稲葉正勝	3重層塔型	1706再建	3重層塔型			1870取壊
22	越後	新発田城		外様：1628溝口宣直	天守なし	四代重雄正室大河内松平家	3重層塔型		3重層塔型	明治取壊
23	越後	長岡城		譜代：1618牧野忠成	3重層塔型		3重層塔型			1868焼失
24	越後	村上城		譜代：1644本多忠義	3重層塔型		3重層塔型			1667焼失
25	越前	丸岡城	3重層塔型	譜代：1624本多成重立藩	3重望楼型	1695丸岡騒動			2重望楼型	現存　重文
26	越前	福井城	5重層塔型	御家門：1624松平忠昌	望楼型4重(2)	1669焼失				1669焼失
27	越前	大野城	5重層塔型	親藩：1644松平直良		1682土井利房：譜代	3重層塔型、3重層塔型	2重層塔型(3)		1775焼失
28	信濃	松本城		親藩：1633越前松平直政：家康孫		1725刃傷改易、戸田松平家	5重層塔型、4重層塔型小天守なし		5重層塔型	現存　国宝
29	信濃	上田城		願譜代：1628仙石政俊	2重層塔型		2重層塔型			1874取壊
30	信濃	飯山城		1639佐久間改易、譜代：1639松平忠倶	2重層塔型		天守なし			
31	信濃	高遠城		譜代：1636鳥居忠春、1652刃傷沙汰	天守なし1重隅櫓	1689高坂権兵衛事件改易	天守なし櫓なし			
32	諏訪	高島城		譜代：1640諏訪忠恒			3重層塔型	1783二の丸騒動	3重望楼型	1875取壊
33	美濃	大垣城		譜代：1635戸田氏鉄：正妻家康姪	3重層塔型		4重層塔型		4重層塔型	1945焼失
34	美濃	岩村城		譜代：1646丹羽氏定	2重層塔型	1702大給松平家	3重層塔型			1873取壊
35	駿河	田中城		譜代：1649西尾忠昭			2重層塔型、2重層塔型			現存
36	遠江	掛川城		外様：1648北条氏重：家康甥	3重層塔型		3重層塔型			1854倒壊
37	遠江	横須賀城		譜代：1645本多利長		1682西尾忠成：家康外孫	3重層塔型、4重層塔型			
38	三河	西尾城		譜代：1646井伊直好	3重層塔型	1655大改修	3重層塔型			1872取壊
39	三河	刈谷城		譜代：1649松平定政、1651改易	2重望楼型	1651稲垣重綱：譜代	2重層塔型			1871破却
40	三河	岡崎城		譜代：1645水野忠善			3重層塔型、4重層塔型	1752水野騒動	3重望楼型	1873～4取壊
41	三河	田原城		譜代：1647戸田忠昌	天守なし櫓なし		天守なし櫓なし、2重層塔型			
42	尾張	名古屋城		御三家：1650徳川光友：家康孫				1739蟄居謹慎	5重層塔型	1945焼失
43	尾張	犬山城		譜代：1625成瀬正虎：正室家康孫：尾張藩付家老			3重層塔型		3重望楼型	現存　国宝

	国	城郭名称	慶長国絵図	元和-寛永期	正保城絵図1644-54	事項：正保以降	日本古城絵図17c後半～	中期以降	古写真	現状
44	伊勢	亀山城		譜代：1636本多俊次	3重層塔型		3重層塔型			1873取壊
45	伊勢	桑名城		親藩：1635松平定綱：家康弟	4重層塔型		4重層塔型			1701焼失
46	近江	彦根城		譜代：1615井伊直孝：妹が家康息子嫁				1860桜田門外の変	3重望楼型	現存　国宝
47	近江	膳所城		譜代：1616本多康俊：家康従兄弟	4重層塔型		4重層塔型			1870取壊
48	山城	二条城	5重望楼型(4)	徳川宗家	5重層塔型1620(5)・1624(6)					1750焼失
49	丹波	丹波亀山城		譜代：1648松平忠晴：家康姪孫	5重層塔型				5重層塔型	1877取壊
50	丹波	篠山城		譜代：1649松平康信	3重層塔型	1748移封	2重層塔型			1873取壊
51	摂津	高槻城		譜代：1649永井直清			3重層塔型	3重層塔型(7)		1874取壊
52	摂津	尼崎城		譜代：1643青山幸利	4重層塔型(8)	1711松平忠喬：桜井松平氏	4重層塔型			1873～9取壊
53	播磨	明石城		譜代：1639大久保季任	3重層塔型				3重層塔型	現存　重文
54	播磨	姫路城		親藩：1639松平忠明：家康外孫					5重望楼型	現存　国宝
55	和泉	岸和田城	天守なし 二重櫓	譜代：1640岡部宣勝：家康外孫	5重層塔型		5重層塔型			1827焼失
56	伯耆	米子城		願譜代：鳥取藩支城　着座家筆頭			4重層塔型		4重望楼型	1879取壊
57	出雲	松江城		親藩：1638松平直政：家康孫	5重層塔型		5重層塔型	1731官位降格	4重望楼型	現存　国宝
58	備前	岡山城	4重層塔型	外様：1632池田光政：徳川秀忠外孫	4重望楼型				4重望楼型	1945焼失
59	美作	津山城		外様：1634森長継	5重層塔型	1698松平宣富：越前松平氏			5重層塔型	1873取壊
60	備中	松山城		外様譜代格：1642水谷勝隆	2重層塔型	1681水谷勝宗大改修			2重層塔型	現存　重文
61	備後	福山城		譜代：1619水野勝成：妹が家康養女	5重層塔型				5重層塔型	1945焼失
62	備後	三原城		外様：広島藩支城、広島藩筆頭家老	2重望楼型　天守台		2重望楼型			1872取壊
63	安芸	広島城		外様：1632浅野光晟：家康外孫	5重層塔型・小天守三重望楼型	1701分家刃傷沙汰	3重層塔型	1833徳川家斉娘縁組	5重望楼型	1945倒壊焼失
64	長門	萩城		外様：1623毛利秀就：正室家康孫			5重望楼型		5重望楼型	1874取壊
65	讃岐	丸亀城		外様：1641山崎家治	3重層塔型（平側北向）	1673大改修			3重層塔型	現存　重文
66	伊予	伊予松山城		親藩：1635松平定行：家康甥		1784焼失		1854再建	3重層塔型	現存　重文
67	伊予	大洲城		外様：1623加藤泰興	3重層塔型			1800頃正室：徳川吉宗曾孫	4重層塔型	1888取壊
68	伊予	宇和島城		外様：1615伊達秀宗		1657伊達宗利：正室家康曾曾孫			3重層塔型	現存　重文
69	土佐	高知城		外様：1610山内忠義	3重望楼型　高欄なし	1747再建	4重望楼型		4重望楼型	現存　重文
70	筑後	久留米城		外様：1620有馬豊氏：正室家康姪孫					3重層塔型	1874取壊
71	筑後	柳川城		外様：1620立花宗茂：2代忠茂正室秀忠娘					5重層塔型	1872焼失
72	豊前	小倉城		譜代：1632小笠原忠真：正室家康曾孫	5重層塔型					1837焼失
73	肥前	唐津城		1637島原の乱、譜代：1649大久保忠職	2重層塔型	1678大給松平氏				1871取壊
74	肥前	島原城		1637島原の乱、譜代：1638高力忠房		1668深溝松平氏	5重層塔型			明治取壊
75	肥前	佐賀城		外様：1613鍋島勝茂：継室家康曾孫	4重層塔型(9)		3重層塔型	1774江戸城拝謁遠慮		1726焼失
76	肥後	熊本城		外様：1633細川忠利：正室家康曾孫				1747刃傷沙汰	3重望楼型	1877焼失
77	肥後	八代城		外様：1646松井興長 徳川直参 熊本藩筆頭家老	4重層塔型					1672焼失
78	豊後	日出城		外様：1642木下俊治：正室松平忠利娘	3重層塔型					1874取壊
79	豊後	臼杵城		外様：1641稲葉信通：正室徳川氏外戚	3重層塔型	1655天守修理				1873取壊
80	豊後	府内城		外様：1634日根野吉明	4重層塔型	1658松平忠明：家康外孫：大給松平氏				1743焼失
81	豊後	岡城		外様：1651中川久清：家康外孫	3重層塔型				3重層塔型	1774焼失
82	日向	延岡城		外様：1614有馬直純：継室家康娘		1683焼失	3層層塔型			1870廃城

(1)江戸図屏風 国立歴史民俗博物館所蔵　(2)福井城天守絵図　(3)越前国大野城破損修復願絵図 貞享5年 柳廻社蔵　(4)洛中洛外図屏風 堺市博所蔵　(5)池田本洛中洛外図　(6)中井家建築指図集　(7)大坂より松江まで航路図 神戸市立博物館蔵　(8)寛文十年頃尼崎城下絵図 尼崎市立地域研究史料館　(9)佐嘉小城内絵図 徴古館所蔵

次に変化した例を見る。層塔型は徳川氏の天守形式で格式が高い。徳川宗家や御三家は元和時点では五重層塔型と考えられる。望楼型は織豊期の古い天守形式で、徳川氏の層塔型天守の下位に付けられたと思われる。

天守が格式を上げた例が、上山城、二本松城、笠間城、川越城、新発田城、大垣城、岩村城、刈谷城、高知城。格式を下げた例が、山形城、白河小峰城、高崎城、飯山城、高遠城、篠山城、松江城、広島城、佐賀城。

格式を上げて櫓が建造された例として二本松城を検討する。二本松藩は加藤明勝が1643年に改易された後、代官支配・幕領を経て、丹羽光重が入った。外様大名の丹羽光重は入国後すぐに天守を建造できなかったと思われる。正保城絵図に描かれた二本松城は石垣で築かれているが、天守や隅櫓は無い。六代丹羽高庸は徳川宗直の娘（徳川吉宗の従姪）達姫を正室に迎えている。徳川氏との親戚関係を持つことで格式が上昇したと思われ、この時期に二本松城は整備され、日本古城絵図に描かれた二重層塔型櫓が建造されたと考えられる。

格式が下がり天守が無くなった例として山形城を検討する。最上騒動（1622年）による最上家改易後の藩主鳥居忠恒も末期養子の禁[49]に触れて改易され、次に山形城に入ったのは親藩の家康孫保科正之、家康孫松平直基、家康外曽孫松平忠弘で、正保城絵図では三重層塔型櫓が描かれている。松平忠弘と入替転封された奥平昌能は前任地宇都宮藩で殉死禁制違反を犯し、山形藩に減封移封された。これ以降、山形藩は左遷地となる。江戸城において刃傷沙汰で刺殺された堀田正俊の跡を継いだ正仲は山形藩に減封移封された。また奥平松平家松平忠弘は、白河藩主時代に白河騒動と呼ばれる家臣の紛争により謹慎を命じられ山形藩に左遷移封された。将軍後継問題で処分された松平乗邑息子の乗祐も山形藩に減封移封された。最終的に水野家が山形藩に入り明治維新を迎えた。天保の改革に失敗した水野忠邦が失脚し、子の忠精が山形藩に左遷されたのである。日本古城絵図では山形城は天守の無い城郭として描かれており、処分直後の大名は天守が建てられなかったと考えられる（図２）。

これまでは、武家諸法度の城郭規制に基づき、天守は当初形状を変化させることなく維持されたと考えられてきた。しかし明治初期の古写真をみると分かるように、十数年程度メンテナンスを怠っただけで、天守や櫓は漆喰が剥がれ落ちてみすぼらしくなる。恒常的にメンテナンスし天守を維持したのは、天守が藩主・城主の家格序列の表象であり、江戸幕府の大名支配における藩主のランクを示すからである。初代藩主とは、その家系がその藩に入った最初の藩主である。改易で新たな家系の初代藩主から藩が始まったにもかかわらず、以前の改易された他家の天守を後生大事に守ってきたとするこれまでの認識を見直す必要があるのではないだろうか。

城戸久は、「宇和島城天守の寛文時に於ける再築事情は舊天守の焼亡復興などと言ふのではなく、只腐朽に依る全くの改築であり、且つ3重であることと、初重大さのみ舊規を踏襲したに過ぎなく、平面、構造、外容ともに總て新様に改められたものであることが解る。江戸時代に於ける武家諸法度に依る城郭修築の掣肘は頗る嚴重であつたことは一般の通念となつてゐるが、それは主として普請に屬する部分に就てであり、建築物卽つ作事に關しては法度の明文の如く割合に寛大であつて、天守の改築なども許され、又先規の如くと言ふ條件もかくの如き程度で差支へなかつたことが、本考究に依って充分に知られよう。」[50]と述べており、武家諸法度の規制が作事を全く禁止するものではなかったことが指摘されている。但しこの場合は「割合に寛大」だったからではない。寛文年間の宇和島藩主伊達宗利は外様大名だったが、その正妻は徳川家康の曾孫であったため、三重層塔型天守が建てられたと考えられる。家康子孫を家族に迎えた外様大名の三重層塔型天守の丸亀城、大洲城、徳島城、四重層塔型天守の小倉城が正保城絵図にあり、宇和島城天守もこの中の一つに位置付けることができる。

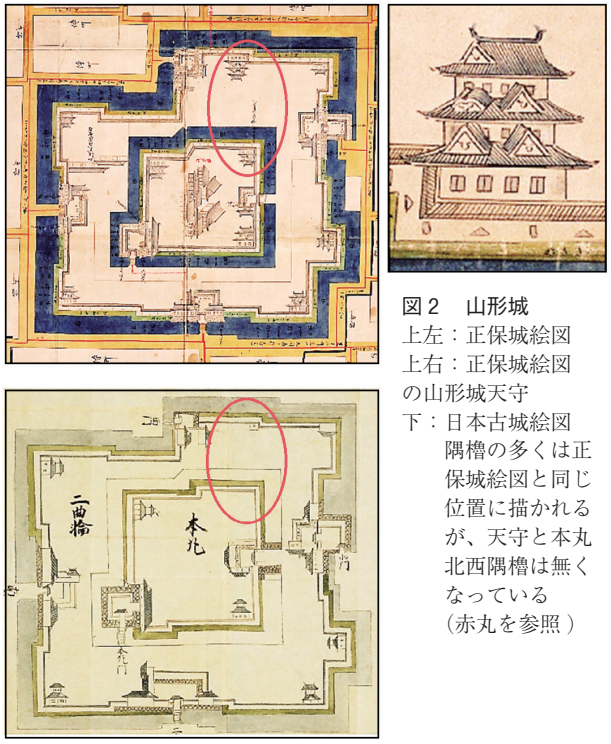


図２　山形城
上左：正保城絵図
上右：正保城絵図の山形城天守
下：日本古城絵図
隅櫓の多くは正保城絵図と同じ位置に描かれるが、天守と本丸北西隅櫓は無くなっている
（赤丸を参照）

天守の形状変化は幕府の大名統制の一環である城郭規制に関連づけられる。天守は、城下では藩主の権威を示す威信装置の機能を持つこともあったが、本質は江戸幕府支配層内部における大名の序列格式を表すところにある。大名にとって幕府内の序列格式はたいへん重要だった。大名はそれぞれの藩で、また譜代大名は幕府の諸役も兼務し、徳川幕府支配を担い実行することを求められた。このような幕府支配の構成員としての大名は、藩支配の維持経営を幕府に制御されていた。御家騒動など不祥事の処分の一つとして天守格式は下げられた。また徳川家との縁組により天守格式が上げられた。大名格式が上昇下降した場合、将軍の命[51]により天守の外観改変工事が行われた。そのため江戸時代を通じて天守は大なり小なり形状変化した。現存天守や古写真に残された天守の形状は、その天守が建てられた当初の姿ではなく、改造改変を繰り返した最後の姿である。

Ⅷ. 天守発達説の検討

天守は江戸幕府の大名制御・城郭規制の枠組みにおいて大名格式を示し、格式上昇下降に合わせて天守改造が行われていたと考えられる。しかしこれまで、天守は望楼型から層塔型へと変化し、それは天守の建築技術の進歩と、天守台の石垣技術の進歩によるものと考えられてきた。まず、天守建築の発達説について検討を行う。

天守に関する従来の発達説では、「天守の外観は初期の望楼式天守から層塔式天守へと発展する。層塔式天守は慶長年間のなかば前後に完成し、元和以後の天守は、大部分基本的に層塔式であった。天守の外観が望楼式から層塔式へと一体化するのにともなって、内部の架構も通柱によって一体化される傾向が認められる。」[52]と考えられてきた。すなわち、望楼型は上層望楼部と下層入母屋部が構造的に分離し、層塔型は通柱を用いた一体構造[53]とされた。逓減率の大きい初期望楼型から、逓減率の小さい後期望楼型へ、そして一体型の層塔型へと天守は構造発達したとされてきた。しかし近年の修理工事などにより、異なる新しい知見が得られている。

犬山城天守は下部に一・二階通柱、上部にも三・四階通柱が使われている[54]。丸岡城天守の場合、二階は望楼部ではなく下層入母屋部なので、二・三階柱は上層と下層を貫く通柱となる。五重六階の姫路城天守は心柱と呼ばれる太い通柱が二本、地階から最上階床下までを貫いている[55]。このような長大な心柱を用いる構造は既に安土城天守に存在したと推測されている。さらに、四重五階の松江城天守では、地階・一階柱、一・二階柱、二・三階柱、三・四階柱、四・五階柱の通柱が互い違いに配されている。この「互入式通柱」構造は、松江城天守国宝化の要因のひとつとなった[56]。これまでこの互入式通柱は、望楼型から層塔型に変容する移行形態とされてきた。しかし合計96本もの二階分通柱をバランスよく配置し荷重を分散させる構造は、移行形態というよりは、むしろ高度に発達した完成形と見る方が適切である。

層塔型天守では、五重六階の松本城天守の場合、一階と二階、三階と四階、五階と六階に階を貫く通柱が使われている。松江城天守の通柱ほどバランスよく配置されていないが、二階分通柱の構造となっている。大洲城天守や福山城天守では二階分通柱と心柱の併用構造だったという[57]。心柱や通柱は、望楼型天守と層塔型天守との区別無く用いられていたようである。

天守の外観は望楼型や層塔型であるが、主体部はいずれも通柱と貫や差物で固められた軸部構造体であった。天守台石垣は擁壁なので、石垣天端に大きい荷重が掛かると石垣は崩れてしまう。石垣にそそり立つように天守を建てるためには、天守台内側に地下空間を設け、主体部の基礎を地下室の低い位置に置き、荷重点を下げることと、主体部から差梁で下屋を出して石垣天端にかかる荷重を低減することが不可欠なのである[58]（図３）。

彦根城天守は主体部分から差梁状の土台を張り出し、一階下屋を天守台石垣天端に載せる。熊本城天守は大引を石垣天端より外に張り出している。いずれも荷重が石垣天端に集中しないように設計し、石垣天端に大きい荷重をかけて石垣を崩すことを回避している。

望楼型天守に通柱が用いられている点について、「意外かもしれないが、通柱は旧型の望楼型天守には少し使い、新型の層塔型天守では滅多に用いないのである。」

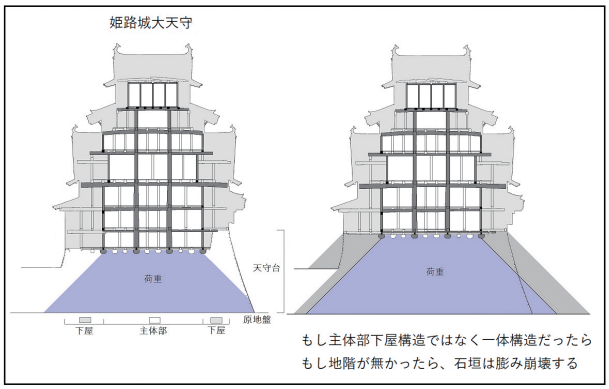


図３　天守の主体部・下屋構造と石垣にかかる荷重
注54所収模式図を一部改変

と三浦正幸は述べている[59]。麓和善の現存天守と櫓の通柱一覧によれば、現存十二天守のうち通柱が全く使われていないのは、望楼型の彦根城天守と層塔型の丸亀城天守だけである[60]。これより、望楼型天守と層塔型天守で通柱使用の差異は無いと考えられる。

次に天守台石垣の技術的向上により、望楼型から層塔型への転換が起こったとする天守台原因説を検討する。

「櫓の部分に設けられた大きな入母屋造の屋根は、単に天守発生ならびに発達の過程をとどめるだけでなく、不規則な平面や、逓減が一定でない場合、屋根を納めるために不可欠の構造である。したがって、平面が長方形になり、上層への低減が各面一様になると、次第に入母屋造や比翼入母屋造の屋根は消滅し、基本的にはすべて寄棟の屋根で構成される外観が生れる。松本城天守はその形式の早い例であるが、平面が不整形のため、屋根の納まりに振隅の部分が多く見られる。一方、名古屋城大天守は、三重の屋根に比翼入母屋造が見られるが、二重および四重は寄棟で、寄棟造を基本とする層塔式天守に近い形式となっている。」と平井聖は述べている[61]。

しかし、松本城の場合、天守の不整形と振隅に直接的な関係を見出すことはできない。松本城大天守の平面は天守台の不整形に沿い僅かに傾いた平行四辺形であるが、四隅とも振隅にはなっていない。この程度の僅かな平面の傾きやそこに架ける屋根は施工の範囲で修正が可能である。特徴的な振隅が見られるのは、乾小天守である。乾小天守の石垣は整形であり、乾小天守だけを考えるなら、四十五度の寄棟に納めることは当然可能である。しかし乾小天守は大天守の軸線に対して四度東に振れている。大天守と屋根の稜線を揃えるため、乾小天守は振隅に設計されたと考えられる。すなわち大天守との釣り合いを考慮して、乾小天守の北西隅棟の方位と大天守の北西隅隅棟の方位を一致させたと考えられる。また、南西隅棟の方位も乾小天守と大天守で一致させている。こうして西側と南側に巡る堀側からの視線を意識し、連結式天守諸重隅棟の稜線を揃え、立面を整え、景観を演出したと思われる。これが乾小天守の振隅の目的と考えられる。結果として、松本城天守は連結式天守台が不整形のために振隅を用いていると言えなくはない。しかしそれは連結式天守台平面が不整形の結果、仕方なく振隅が用いられたのではなく、不整形の天守台上に建造する天守の姿形を整えるため、敢えて振隅を用い、高い技術力で屋根を納めているのである。松本城天守の振隅は、望楼型から層塔型への移行の証拠ではない。

三浦正幸は、「望楼型天守の利点は、どんなにゆがんだ平面の天守台にも建てられることである。天守台石垣の築造技術が低かった時期には、天守台の平面が台形や多角形であったり、やたらに細長かったりした。望楼型天守では、どのような天守台であろうと、その上いっぱいに一階を造ってしまう。したがって、一階平面はゆがんだ形になる。その中央部には、正確な方形の身舎を取る。身舎は数室の部屋に間仕切る。身舎の周囲には不整形な形の通路状の部分が残るが、そこは武者走となる。籠城時には、弓や鉄砲を使う軍事拠点となる。一階平面のゆがみはその上方に被る入母屋造の屋根まで伝わる。ところが、その屋根上に載せる望楼は、下の屋根の形とは無関係に、正確な正方形平面とすることができる。このようにして望楼型天守は、どんなにゆがんだ天守台にも建てることができるのである。」と述べ、一階平面が台形に歪んだ例として犬山城天守と姫路城天守、著しく細長い例として彦根城天守を示している[62]。

犬山城天守の東面と西面の不整形部分は一階の付櫓として納めており、二階は整形平面である。二階の入母屋屋根で不整形を吸収しているのではない。天守台の不整形により望楼型天守となったのではない。

姫路城大天守一階は台形平面である。北側壁面が約八七尺で、南側壁面より二尺長く、東側壁面は三度西に振れている。二重目の大入母屋の東面の軒も、東側壁面に沿った軒の出となっている。この歪みは実際の天守を眺めても全く気付かない。大入母屋の大棟は西側より東側が一尺ほど長く、東北側降り棟と東北側隅棟の距離も、西側の両隅と比べて一尺ほど長い。大入母屋大棟が左右対称とはならず、立面図では大棟長さの違いが悪目立ちする。大入母屋での台形平面処理は特に成功しているわけではないが、実際の天守眺望では全く気にならない。姫路城大天守は後期望楼型で逓減率は小さく一定である。姫路城大天守程度の天守台不整形の場合、入母屋大屋根ではなく寄棟屋根であっても施工で納めることができ、層塔型天守として違和感なく仕上げることができる。天守台の不整形を入母屋大屋根で修正するために望楼型を採用したとはいえない。

彦根城天守一階は南北が七十尺、東西が四一尺の細長い平面である。一階に大入母屋の屋根を架けている。彦根城の天守台は歪みの全くない長方形であり、その細長い平面は石垣技術の未熟さゆえではなく、普請時に天守台を細長くする意図があったと思われる。やはり天守台の技術的制限による望楼型天守とはいえない。

初期望楼型の丸岡城天守の天守台も整った正方形平面であり、望楼型天守台原因説には根拠が不足している。しかも丸岡城や松江城の望楼型天守は建築年代が元和以降に下る可能性が高く、初期望楼型と天守台石垣の技術的未発達を関連づけられなくなっている[63]。

次に天守台築造技術の時期を確認する。文禄期には巨石を用いた二段積み石垣が多かった。そして慶長期にはじめて一段積み高石垣が築かれた。元和期には粗加工石材や規格石材が量産され始め、寛永期に矩・反り等の法式や算木積み技法が確立し、控が長く石面もほぼ規格化した石材による、精緻な反りをもつ高石垣が完成した[64]

石垣の発展は採石・加工技術の発達に基づく。元和六年～寛永五年（1620～1628年）の徳川期大坂城普請で石工技術が全国に普及し平準化した。石工技術の展開は江戸幕府による大名統制によって促されたのである[65]。石垣の技術的画期は慶長期と元和期の間ではない。元和・寛永期が石工技術と石垣築造技術が確立し平準化し普及した時期であった。この元和・寛永期こそ、武家諸法度元和令から正保城絵図に至る時期であり、城郭規制と大名格式に基づく江戸期天守の形成期である。

これまで天守形状を技術発達と関連付け、元和以降には層塔型天守が建築されるとしたため、丸岡城天守が寛永年間の建築と判明した時、層塔型が主流となった寛永期になぜ丸岡城天守が望楼型で建築されたのか、という戸惑いがあった。しかし望楼型と層塔型の天守も石垣も技術的に異なるところは無い[66]。しかも望楼型天守が慶長期以前に限られるという前提が崩れている。寛永期と判明した丸岡城の望楼型天守を正しく城郭史に位置付けるためには、「未発達な天守構造」と「天守台の不整形」と「望楼型」と「慶長年間」を結び付ける考え方を再考し、江戸幕府の大名支配における望楼型と層塔型の天守格式の意味を理解する必要がある。

Ⅸ．形状変化を可能にした天守の構造

天守改造を支えた技術的側面を検討する。

元和期以降の望楼型天守と層塔型天守の決定的な違いは、天守台の不整形に制限され、あるいは天守の構造形式に規定されているのではなく、見かけ、外観の形である。入母屋破風の上に上部望楼が載るような見かけが望楼型天守である。逓減率が一定で全体が一体であるような見かけが層塔型天守である。この見かけの違いは、先に述べたように、藩主・城主の格式によるものであって、技術的・建築構造的な要因によるものではない。

天守台の分析から、望楼型天守も層塔型天守も主体部は通柱を用いた構造体と判明した。望楼型の入母屋屋根も層塔型の千鳥破風も唐破風も寄棟屋根も鯱も、下屋や屋根に付加されるもので、装飾のパーツと見做せる。これらのパーツを付加あるいは除去し、重数の増減や望楼型と層塔型の変換などの改造が行われたと考えられる。

重数が変更された例として丸岡城天守を検討する。慶長国絵図で福井藩支城として三重層塔型に描かれた丸岡城天守は、正保城絵図では三重望楼型に描かれる（図１）。これは結城秀康嫡男松平忠直の元和九年（1623）改易により丸岡藩が立藩したが、藩主本多成重は福井藩付家老だった経緯によりランクを下げられ、寛永五年（1628）に三重望楼型天守が建造されたと考えられる。正保城絵図のほか、三重望楼型に描かれた丸岡城天守絵図がいくつか存在する[67]。自然科学的年代調査で判明した丸岡城天守の寛永期の建築年代は主体部の建築年であり、その当時は三重望楼型の姿だったと思われる。ところが、現在の丸岡城天守は二重望楼型である。元禄八年（1695）の丸岡騒動と呼ばれる御家騒動との関連は不明だが、江戸中期以降に重数を減らしたと考えられる。現在の丸岡城天守は二重屋根の内部は三階建てで、重数と階数が一致しないことも、重数減数を示唆する。

Ⅹ．結論

慶長国絵図、正保城絵図、日本古城絵図の表現の信憑性を確認し、これらに描かれた天守の形状重数の変遷が大名家の格式変遷と対応することを見出した。

これまで、城郭建築は元和一国一城令・武家諸法度でその発達や変化を停止し、元和以前の形式が凍結されたと考えられてきた。現存天守の姿を建築当初のままとし、現存天守の建築年代を記録に残る古い時点とした。現存天守が十二棟しか残っておらず、傾向や変遷を辿る事例数として少なすぎるにもかかわらず、天守形状の違いを年代差とみなした。そして元和・寛永期以降に建築された天守は価値を積極的に評価されてこなかった[68]。これに対し、近年の自然科学的年代調査法や絵画資料の再評価により、現存・非現存天守の新たな知見が得られている。戦国時代から江戸時代初頭の姿と思われてきた現存天守建築は、改易や徳川氏との縁戚関係による大名家の家格変動に伴い改変された可能性がある。江戸幕府の大名支配において天守建築は位置付けられるのである。

以上、城絵図を研究対象とし、新たな知見に基づく新たな天守史観を提示した。

謝辞

坂井市丸岡城国宝化推進室、吉田純一先生、堤徹也様、角明浩様、安井妙子先生、光谷拓実先生、箱﨑真隆先生、坂本稔先生、門叶冬樹先生、厚東洋輔先生、田邊いづみ様、福井県文書館、松平文庫、岡山シティミュージアム、大阪城天守閣、堺市博物館、福山市文化観光振興部、千葉県立図書館、阿部和建築文化研究所に感謝申し上げます。

注

1）鳥羽正雄『近世城郭史の研究』雄山閣出版、1982.7
2）白峰旬『日本近世城郭史の研究』校倉書房、1998.5
3）藤岡通夫『城と城下町』中央公論美術出版、1988.6
4）城戸久『城と民家』毎日新聞社、1972.6
5）平井聖『日本建築史基礎資料集成14.城郭Ⅰ』中央公論美術出版、1978.7、pp.8-12
6）内藤昌『復元日本大観 1.城と館』世界文化社、1988.4
7）三浦正幸『城のつくり方図典　改訂新版』小学館、2016.2
8）本稿では、天正から江戸幕府成立までの1573～1603年を織豊期と表記する
9）内藤昌、『復元日本大観 1.城と館』世界文化社、1988.4、p.82、pp.110-111
10）坂井市教育委員会文化課『丸岡城天守学術調査報告書』、2019.3
11）西和夫「犬山城天守の創建年代について」『日本建築学会論文報告集』261号、1977.11、pp.141-149
12）麓和善・光谷拓実『国宝犬山城天守再考』犬山市教育委員会、2021.3
13）安高尚毅・金澤雄記・和田嘉宥「初期松江城天守の形態に関する復原的考察」『日本建築学会中国支部研究報告集』40巻、2017.3、pp. 959-962
14）『江戸幕府撰慶長国絵図集成』柏書房、2000.4“越前国絵図”デジタルアーカイブ福井〈https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/archive/da/detail?data_id=011-1001807-0〉（2021.9.27）
15）“正保城絵図”国立公文書館デジタルアーカイブ〈https://www.digital.archives.go.jp/DAS/pickup/view/category/categoryArchives/0300000000/0305000000_2/01〉（2021.9.27）
16）“日本古城絵図”国立国会図書館デジタルコレクション　旧鳥羽藩主稲垣家旧蔵全355面、城数220余。藩用甲州流兵学研究資料として寛文から貞享、元禄ごろに写し集めた城郭図集〈https://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/post-1007.php〉（2021.9.27）
17）三浦正幸監修・来本雅之編著『古写真で見る幕末の城』山川出版社、2020.5
18）中尾七重『絵図にみる白石城大櫓の変遷』建築史学会2021年度大会発表、2021.4　白石城（宮城県）は残された多数の城絵図に見る大櫓（天守）の変化と天守台発掘遺構が対応し、天守形状の変化が実証された。
19）藤岡通夫は『天守閣建築の研究』学位論文、1959.1　で天守を望楼風と層塔風に分類した。平井聖は前掲5脚註17-18、pp.4-6で望楼式・層塔式とした。本論では天守外観形状を表す用語として望楼型・層塔型を用いる。
20）白峰旬『豊臣の城・徳川の城―戦争・政治と城郭』校倉書房、2003.8、pp.318-326
21）中尾七重「九間を持つ関東平野の民家と古河公方の関連について」『建築史学』72号、2019.3、pp.21-25
22）藤井恵介「絵巻物の建築図は信頼できるか」『絵巻物の建築を読む』東大出版会、1996.11、pp.203-227
23）瀬田勝也『洛中洛外の群像　失われた中世京都へ』 平凡社、1994.8
　マシュー・マッケルウェイ「洛中洛外図の発見―アメリカ人研究者の立場から」『紀要言語文化』19号、明治学院大学言語文化研究所、2002.3、pp.128-149
　小島道裕「洛中洛外図屏風歴博甲本の制作事情をめぐって」『国立歴史民俗博物館研究報告』第180 集、2014.2、pp.107-128
24）内藤昌・大野耕嗣・中村利則「聚楽第 武家地の建築 近世都市図屏風の建築的研究 洛中洛外図その2」『日本建築学会論文報告集』180巻、1971.2、pp. 61-71, p.76
　藤井恵介「黒く塗られた建築：上杉本洛中洛外図屏風にみる禅宗寺院の彩色」『日本建築学会大会学術講演梗概集』F9040、1989.9、pp. 731-732
　高屋麻里子「洛中洛外図屏風に描かれた町屋と土蔵の変遷」『日本建築学会計画系論文集』607巻、2006.9、pp.157-162
　清水擴「洛中洛外図屏風からみた京町屋の構造」『建築史学』59巻、pp.54-62、2012
　丸山俊明「歴博甲本『洛中洛外図』屏風の桁のない町家について-京都府向日市の須田家住宅をふまえて-」『日本建築学会計画系論文集』688巻、2013.6、pp. 1373-1379　など
25）白峰旬『江戸大名のお引越し　居所受け渡しの作法』新人物往来社、2010.10、pp.83-84、pp.116-123、pp.137-138、pp.157-159、
26）矢守一彦「幕府へ提出の城下絵図について」『待兼山論叢日本学篇』13号、1979.3、pp.1-16
27）矢守一彦「幕府撰正保城絵図」『都市図の歴史日本編』講談社、1974.5、pp.88-92
28）矢守一彦「「御絵図御指図帳」と絵図方」前掲27、pp.108-111
29）鳥羽正雄　前掲1、1982.7、pp.27-29
30）島田市博物館公式ホームページ　https://www.city.shimada.shizuoka.jp/shimahaku/docs/kuni-01.html（2021.9.27）
31）笠谷和比古「関ケ原合戦と近世の国制」思文閣出版、2000.12
32）白峰旬「譜代系城郭に関する一考察」前掲20、pp.214-215
33）毛利家文書、重要文化財、慶長二十年閏六月十三日酒井忠世外二名幕府年寄連署状写、防府市毛利博物館所蔵
34）城郭のみならず近世民家でも、武田、後北条、龍蔵寺の支配正当性を否定する政策が見られる。中尾　前掲21、中尾「平行二棟造系民家の分布と肥前守護小弐氏・肥後守護菊池氏の支配地の関連について」文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要第49集、2018.1
35）笠谷和比古「元和五年の福島正則改易事件」『近世武家社会の政治構造』吉川弘文館、1993.3、pp.272-288
　白峰旬「福島正則改易事件についての一考察」前掲20、pp.165-180
36）白峰旬「譜代系城郭に関する一考察」前掲20、pp.181-217
37）白峰旬「老中奉書（城郭修補許可）の書式に関する基礎的検討」前掲20、pp.275-277
38）小和田哲男「戦国城下町の研究」『小和田哲男著作集』第七巻、清文堂出版、2002.8、p.356
39）幕末の紅葉山文庫蔵書目録『増補御書籍目録』には131鋪の所蔵が記録されるが、のち散逸し、現在は63鋪を所蔵。

40）川村博忠「江戸幕府の日本地図　国絵図・城絵図・日本図」『歴史文化ライブラリー』286号、吉川弘文館、2010.1、pp.18-20
41）川村博忠編『江戸幕府撰　慶長国絵図集成』柏書房、2000.4
42）和泉市史編纂委員会編『泉邦四県石高：寺社旧跡并地侍伝』和泉市史編さん委員会、刊年不明、大阪市立図書館蔵
43）出典　越前国絵図（慶長国絵図）：松平文庫（福井県文書館保管）、正保城絵図：国立公文書館デジタルアーカイブ（公開情報、二次使用可）、丸岡城写真中尾撮影
44）「越前国大野城破損修復願絵図（本丸部分）」貞享五年、柳廻社蔵、大野市歴史博物館企画展『絵図に見る越前大野城と江戸屋敷』2020.8～10
45）「天守絵図」『福井市史資料編別巻　絵図・地図』福井市、1989.3、pp.82-83、
46）海道静香「越前国絵図　絵図解題４・越前国慶長国絵図ヵ」、川村博忠編『江戸幕府撰　慶長国絵図集成』柏書房、2000.4、pp.59-74
47）「正保城絵図調達の目的が、従来指摘されてきたような幕府による軍事機密の掌握という一点にのみ収斂されるのではなく、城郭修補願絵図のプロトタイプを諸大名に提示し、絵図画法の基準を明示するという具体的な目的が存在したと考えられる。」白峰旬『幕府権力と城郭統制―修築・監察の実態―』近世史研究叢書16、岩田書院、2006.10、pp.99-100
48）矢守一彦「城絵図と城下絵図」『都市図の歴史日本編』講談社、1974.5、pp.96-111
49）小柴良介「末期養子の禁緩和に関する一考察」『皇學館史學』第２号、皇學館大學史學会、1987.8、pp.60-78
50）城戸久「伊豫宇和島城天守寛文再築とその創建天守に就て」『建築學会論文集』28巻、1943.2、pp.1-17
51）石垣などの普請は奉行所（行政）の管轄だが、天守（作事）は将軍の大名支配だったと推測される。今日普請文書は多く残されているが、天守改変の記録が残されていないのは、普請文書は行政文書であり、天守改変は政治案件であったためと考えられる。
52）平井聖　前掲５、p.6
53）三浦正幸「伊予宇和島城の慶長創建天守」『日本建築学会中国支部研究報告集』18巻、1994.3、pp.313-316、「（宇和島城慶長天守は）望楼式の古式天守でありながら、平面は完全な層塔式天守のものであって、層塔式天守発生の前兆を示すものと評価できる。中略　宇和島城天守は、層塔式天守創案の基となったと考えられ、天守建築史上で特に注目すべき例　中略　注目すべき第二の点は、通し柱を既に多用　中略。天守一階指図において、入側柱の内の五本に「立のぼせ」と記されており、建登せ柱（通し柱の別名）の存在が確認される。」
54）国宝犬山城天守修理委員会編『国宝犬山城天守修理工事報告書』成瀬正勝、1965.8
　麓和善・千田嘉博・山村亜希・鈴木正貴・白水正・犬山市教育委員会『犬山城総合調査報告書』犬山市、2017.3
55）加藤得二「姫路城の建築と構造」『日本城郭史研究叢書』第９巻、名著出版、1981.6、pp.294-300
56）松江城国宝化にかかる文化財審議委員会の答申には、①近世城郭最盛期を代表する四重五階の荘重雄大な天守、②祈祷札２枚により、松江城天守の築造年代が慶長16年（1611）と確定、③２階分の通柱を用いた特徴的で優れた構造、という「新たな知見」が記されている。ここでは松江城天守の互入式通柱構造を、望楼型から層塔型への移行形態とする評価はみられない。
57）萩原さちこ『城の科学　個性豊かな天守の「超」技術』ブルーバックスB-2038、講談社、2017.11、pp.133-137
58）中尾七重・安井妙子「天守の地階と天守台」『日本建築学会東北支部研究報告集計画系』第84号、2021.6、pp.45-48
59）三浦正幸『城のつくり方図典』小学館、2005.3、p.92
60）麓和善・光谷拓実　前掲12、図４－１天守架構模式図一覧、pp.49-50
61）平井聖『日本建築史基礎資料集成14.城郭Ⅰ』中央公論美術出版、1978.7、pp.5-6
62）三浦正幸　前掲59、pp.84-88
63）坂井市教育委員会文化課『丸岡城天守学術調査報告書』、2019.3、
　安高尚毅・金澤雄記・和田嘉宥「初期松江城天守の形態に関する復原的考察」『日本建築学会中国支部研究報告集』40巻、2017.3、pp. 959-962
　犬山城天守については、主体部材年代は辺材完存で1588年が得られている。しかし地下１階の床梁は辺材部分残存で1644年が得られている。このデータは、1588年伐採の前身建物部材を用いて、1644年以降に現在の石垣上に犬山城主体部が建設されたことを示唆している。麓和善・光谷拓実　前掲12
64）田中邦熙・新谷洋二「日本の城郭石垣の変遷と現状」『土木学会論文集』No. 576/IV-37、1997.10、pp. 101-110
65）坂本俊『中・近世移行期における石工技術に関する歴史考古学的研究』奈良大学学位論文　博士（文学）甲第14号、2019.3
66）中尾七重・安井妙子　前掲57、pp.45-48
67）吉田純一「円陵輿地略図　越前丸岡城図（松平文庫）、絵図に見る丸岡城天守」『丸岡城天守学術調査報告書』坂井市教育委員会文化課、2019.3、pp.164-167
68）「泰平の世になると、明暦大火後の江戸城の場合のように無用のものと軽んじられるまでになる。また、建てられても、旧規を踏襲するか、あるいは小規模な、形式ばかりの天守になった。」平井聖『日本建築史基礎資料集成14.城郭Ⅰ』中央公論美術出版、1978.7、p.9